



鉢尾 R18 小説

^う ^ず 埋 ^み ^び 火



呉野 六ツ時

<この本におけるオメガバース世界観>

- ・第1の性（男女）2種と第2の性（ α β Ω ）3種の組み合わせで、 α 男、 α 女、 β 男、 β 女、 Ω 男、 Ω 女の計6種の性別が存在する。
- ・孕むことができるのは女と Ω 男のみ。
- ・孕ませることができるのは男と α 女のみ。

【 α 】

- ・根拠はないがあらゆる面で β 、 Ω に勝るとされている。
- ・ Ω の発情で突発的な興奮状態に陥る。
- ・興奮状態を抑える『鎮静剤』と呼ばれる薬がある。貴重なものが忍術学園には門外不出の生成技法があり割合容易く手に入る。
- ・ α 男性には陰茎の根元に『龟头球』と呼ばれる器官がある。

【 β 】

- ・人口が最も多い。ごく普通の人間。
- ・発情はせず、 Ω の発情にもほぼ影響を受けない。

【 Ω 】

- ・人口が最も少ない。
 - ・成熟すると周期的（ほぼ月1回）に発情するようになる。発情の程度には個人差があり期間は3～7日程度。体内に蓄積した α の発情を誘う匂い（正しくはフェロモン）を一気に体外に放出する。
 - ・発情を抑える『抑制剤』と呼ばれる薬がある。品質はピンキリだが、忍術学園で生成されているものは質が良く効果が高い。
-

<この本におけるオメガバース設定補足>

【 α の発情】

- ・ α は発情期の Ω が放つ匂い（正しくはフェロモン）で本能が強制的に呼び起こされ、突発的な興奮状態に陥る。
- ・ 個人差はあるが、興奮状態では理性が飛び乱暴になる傾向がある。
- ・ 興奮状態における射精は精液の量が非常に多く、持続時間も長い。他、龟头球の肥大化（男のみ）などの反応も起こる。このため Ω に対する生殖率が高い。

【つがい】

- ・ 発情期の性交で α が Ω のうなじを噛むことで『つがい』と呼ばれる関係が成立する。
 - ・ つがい関係が成立すると、 Ω のフェロモンはつがい相手の α にしかならなくなる。また発情期の性交においてもつがい相手の α しか受け入れられなくなり、他の人間と性的な行為に及ぶと眩暈や吐き気に襲われ最悪失神する。
 - ・ つがいの制約を受けるのは Ω のみで α には何も起こらない。
 - ・ つがい関係を解消することはできないとされており、噛み痕は消えることなく生涯残る。
-

熱い。

上も下も分からぬ暗闇の中、三郎はひとり苛烈な熱に苛まれていた。

激し過ぎる欲求と衝動が身の深きから湧き上がってくる。全身の血液が沸騰してしまいそうなほどに、ただただ熱い。初めて直面する身を灼かれるような苦しみ、如何ともし難い強烈な渇きに恐怖すら覚える。体内から滾々と湧き出続ける熱、それがもたらす苦しみからどうにかして逃れたくて必死にもがいた。

しかし意識が朦朧として、身体を思うように動かすことができない。ただ苦しみを紛らわせるためにのたうち回ることすらままならなかった。

どうすることもできず焦熱に喘ぐ中で、ふと顎の辺りにひんやりとした感触を覚えた。

人の手だ。感覚だけでそう判断する。

誰のものとも分からぬその手は、熱を帯びた肌と己の顔かおかたち貌を隠す面との境目をゆっくりとなぞっていく。素顔を暴かれるかもしれない、危機感を覚えるべき状況だ。

だがほどよい冷感と優しい、慈愛の存在を錯覚させるような柔らかな手つきに心中には喜びが生じていた。抗うことも忘れ、胸を震わせる歓喜を吐息と共にほうと吐き出す。

「すぐに、楽にしてあげる」

快さを与えてくれる手つきに似た柔らかな声が、鼓膜を甘く揺らす。

紡がれた言葉を認識するのとはほぼ同時に、突如強烈な快感に襲われた。身体中を暴れ回っていた熱が、悦樂の生まれ出ずる場所へと集まっていくな。

ああ、気持ちがいい。

与えられる快楽に体温が上昇し、呼吸が浅く速くなる。己を苛んでいた激し過ぎる衝動は、それと反比例するように和らいでいった。

先刻までとは質の異なる感覚に翻弄される。相変わらず自由の利かない身体では、身悶えることすら叶わない。

とはいえ強過ぎる快感を持て余しているだけで、苦しくもなければ不快でもない。ただ与えられるままに、過ぎる快楽を喘ぎながら享受し続けるだけだ。

ふと、朦朧とした意識の中に肌色の塊がぼんやりと浮かび上がってきた。次第に輪郭が明瞭になり、やがてそれが何者かの背中であることが分かるまでになる。ほの白い首筋は滑らかで、匂い立つような色香さえ感じられる。

魅惑的なその面は三郎の欲を煽り立て、脳裏に鮮烈に焼き付いた。

そうだ、私はこれが欲しかったのだ。

直感的にそう確信し、欲していたものが目の前にある歡びを嘔み締める。

己を苛んでいた苦しみは快感と歡喜によって完全にかき消された。えも言われぬ快樂の奔流に揉まれ流されながら、目の前にある魅惑的なものをじつくりと眺める。

滑らかな肌に水分を含んでへばりつく長い髪とのコントラストが、ひどく艶なまめかしく美しい。先刻の柔らかな声の主に相違ないのだろうこの背中の主が、宣言のとおり苦しみから救ってくれた。今はさらに、悅樂をも与えてくれている。

この優しく快いものを、手に入れたい。

そんな願望が、三郎の胸に強烈に湧き上がってくる。

（——お前は、誰なんだ）

願いのままに手を伸ばしたところで、三郎はしかしその焦がれる背中を見失った。

一、

次に三郎の視界に映ったのは、薄汚れた小屋らしき建物の梁と屋根板はりだった。

たった今まで目の前にあつたはずの官能的なうなじなどどこにもない。それ以前に近くには人っ子ひとりいなかった。突如現実に取り出された三郎は呆然として瞬きを繰り返した。

夢か。

そう思い至つて視線を巡らせると、周囲には見知らぬ空間が広がっていた。

少々かび臭く汚れてはいるが、雰囲気からして炭焼き小屋であるらしい。使われなくなつて暫く経っているのだろう。

しかしはて、何故自分は今このような場所にいるのだろうか。

この場所に至る経緯がまったく思い出せず、三郎はぼんやりとしたまま首を捻った。

「——お、気がついたか」

戸板を動かす音と同時に聞き慣れた低音が耳に届いた。声の方へ目をやると、戸口に人影がひとつ。逆光で顔は見えないが、誰なのかはうどんのような特徴的な髪の毛の輪郭から瞬時に把握することができた。

尾浜勘右衛門。五年い組の級長を務める、学級委員長委員会唯一の同輩である。互いに組の長という同じ役目を負っていることもあっただろうが、幼い頃から意識的に競い合い肩を並べて研鑽を積んできた親しい友人である。

「……どこまで、覚えてる？」

勘右衛門は後ろ手に戸を閉めながら、ひどく曖昧な問いを投げかけてきた。その顔は薄闇に沈んでいて、未だによく見えない。彼にしては珍しい歯切れの悪さに少々の違和感を覚える。だがこの小屋へやってきた記憶がないことが、実際気になってはいた。

そこで三郎は彼の問いに答えるためにも、目覚めたばかりで働きの鈍い頭脳を叱咤して己の記憶を手繰ることにした。

現在勘右衛門と共にいるのは、学級委員長委員会の上級生として忍務に出たためだ。依頼主は委員会の顧問である学園長先生で、とある城へ書状を届けるよう仰せつかったのである。

実際のところ中身は何のことはない挨拶状つまりは簡単なお使いに過ぎなかったのだが、先生が書状は密書でありこれは忍務である、と仰る以上は宛先含む仔細は当然秘密である。

一旦別れてそれぞれ外出の準備を整え、四半刻の内に出立した。

ドクタケ忍者が辺りをうろついていることには門を出てすぐに気が付いた。どこで聞きつけたのか、奴らの狙いは学園長先生の書状であるらしかった。結果からいえば、我々が託された書状は生憎密書といえるような代物ではなかったのだが。

もしかしたら本物の密書が別に存在していて、我々はそれを安全に運ぶための罠だったのかもしれない。その可能性は大にある。

だが我々はこの密書を運ぶよう任せられただけの身で、特段真実を掴みたいという気もなかったため真相は分からないのだが。世の中には知らぬ方がよいこともある。

侮っているつもりはないが、冷静に対処さえできればドクタケ忍者など敵ではない。五年生にもなれば自他の力量を正確に推し量ることくらいはできる。

結果予定より多少時間を食いはしたが、しつこく狙ってくるドクタケ忍者どもを術で惑わし妨害を躲して、無事に先方へと密書を届けることができた。

御前を辞去し城門を出てから、勘右衛門と二人ハイタッチを決めて互いを軽く讃え合った。そのまま爽快な気分で、一路忍術学園を目指し城下町を発ったのだ。

ああそうか。

三郎はそこでようやく、この場へ至る経緯を思い出せない理由に思い至った。その忍務の帰り道で、発情期を迎えたΩと行き逢ってしまったのだ。

今まで嗅いだことのない甘ったるい匂いに、身体中の血が沸騰してしまいそうなほど激しく昂ぶった。だが三郎が覚えているのはそこまでで、以降の記憶が一切ないのである。

三郎は a だ。そしてあの時、生まれて初めて発情した Ω と接触した。

Ω は出生率が低い上、戦の多いこの世の中では成熟するまで生き延びるのも困難だ。故に、極めて数が少ない。

また Ω は、その特性から忍者には向かないとされている。忍術学園に在籍している者がいたかどうか記憶にないほどだ。なんなら Ω との接触自体が初めてだったかもしれないかった。

その遭遇率の低さから三郎は、 Ω の存在をあまり意識せずに生きてきた。加えて自身の理性が強靱であるという自信もあった。故にたとえ興奮状態に陥ってしまったも、理性でどうにか制御できるだろうと考えていた。明確な根拠もなく『自分は大丈夫』と過信し、 a が必携すべき鎮静剤—— Ω の発情で引き起こされる興奮状態を強制的に鎮められる薬のことだ——を所持していなかったのである。

途切れる寸前の記憶を手繰り寄せる。嗅いだことのない蠱惑的な甘い香は強烈で、身も心もあつという間に絡め取られた。理性で制御する隙など僅かにも存在せず、まるで粘度の高い蜜に落ちた小虫のように、気が付いた時には既にどうすることもできなくなっていたのだ。

次に己を認識したのが今だ。つまり己を取り戻した時にはすべてが終わっていたという訳だ。

半ば呆然としながら、僅かながら思い出された激し過ぎる熱と衝動、そして己の中に棲まう、
「獐猛な欲望の存在に三郎は身震いした。知覚したのは一瞬だったというのに、反芻しただけで
呑み込まれてしまいそうな強烈な感覚に恐怖を覚える。」

「——私は、……どうなったんだ」

三郎は恐怖心をねじ伏せながら、その後の経緯を知るはずの勘右衛門に言葉少なに尋ねた。
表現が曖昧な上に言葉が大分足りない自覚はあったが、大きすぎるショックから立ち直れてい
ない今、それが精一杯だった。

勘右衛門は β だ。 β は α ほどには Ω の発情の影響を受けない。故に自分が今ここにいるのは
勘右衛門の判断と行動の結果なのだと思えるのが自然である。

α の本能は、 Ω とつがいとなって子を成すことを第一とする。その前提に立ち返れば、最悪
の事態は容易に想像できる。妥当なその推測に背筋が凍るような感覚に陥った。

三郎は現時点で、卒業までは学園に在籍するつもりでいる。その先はまだ決めていないが、
目指すは一流のプロ忍者だ。所帯を持つことなど、まだ考えてもいない。

しかしもし本能のままにことに及んでしまったのなら、目を逸らすことは許されない。己の
不慮慮が招いた結果だ、真摯に受け止め責任を取る義務がある。

逃げ出したい気持ちを抑えて己を律する。口を閉ざすと沈黙が重苦しくのし掛かってきた。

それでもなんとか平静を取り繕い、神妙な態度で勘右衛門の返答を待つ。

ようやく薄闇に慣れた目で窺うと、勘右衛門は感情の読めない真顔でこちらを眺めていた。だがそれほど経たぬ内に、よく見せる柔らかな笑みを浮かべた。

「そんな心配しなくても大丈夫だよ。眠り葉盛って縛り上げといったからさ」

笑顔で成された返答に、三郎は緊張させていた身体を緩め肩の力を抜いた。胸に凝っていた不安を、知らず詰めていた息と共に深々と吐き出す。

「はは、安心しただろ」

軽やかな笑い声に誘われて、息を吐き出し切ると同時にゆっくりと顔を上げる。視線の先の勘右衛門は眉尻を下げた呆れ顔でこちらを眺めていた。

「だけどな、aなのに鎮静剤を携帯してないなんて愚の極みだぞ？」

呆れたような口ぶりに、三郎はただ項垂れることしかできない。

一言一句、勘右衛門の言うとおりである。自衛策を怠ったせいでΩの発情に惑わされ、命を落とすようなことになったら……お粗末過ぎて笑い種にもならない。

「返す言葉もないな……、面目ない」

「うわ、びっくりするぐらい素直だな!? 気持ち悪い!」

反省の意を素直に述べると、勘右衛門は大袈裟な素振りて身を引いた。わざとらしい口ぶりから、落ち込む三郎の気持ちを軽くしようとしているのが感じられる。そんな彼らしい気遣いがありがたくて、釣られるように薄く苦笑を浮かべた。

「ま、俺のお陰で何事もなく済んでよかったな。今後は改めろよ」

「ああ、肌身離さず携帯するようになるよ。本当に助かった、恩に着る」

冗談めかした雰囲気を抑え改めて釘を刺してくる彼に、今度も素直に謝意を述べて頭を軽く下げた。再び向き直ると、腕組みをした勘右衛門が何やらしたり顔で頷いている。

「うんうん、そうだな俺のお陰だな。じゃあその恩は、お前の財布と行動で返して貰おうか。本っ当に大変だったんだぞ、暴れるお前をふん捕まえてここまで担ぎ込むの」

勘右衛門の冗談めかした発言に、しかし薄ら浮かんでいた笑みは即引つ込んだ。腕つぶしの強い彼が苦勞するほど暴れたというのか。三郎にはそれが信じられなかった。

身に覚えはないが、そもそもその間の記憶が一切ないのだ。勘右衛門が嘘をつくわけもない。三郎の根拠なき自信は今度こそ粉々に砕け散った。第二の性別の特性に対する考えがどれほど甘かったのかを痛感する。

「——それは、重ねて悪いことをしたな……。そりゃもう、喜んで奢らせて貰うよ」

「うむ、素直でよろしい。峠にできた甘味処の饅頭で手を打とう」

衝撃をなんとか呑み込み、為された言外の要求に請け合う。勘右衛門は偉ぶった態度でその仔細を口にした。三郎の心中を知ってか知らずか、おどけた態度を崩すことなく悪戯っぽい顔で笑いかけてくる。

三郎はそんな彼になんとか苦笑で応じた。氣遣いへの感謝と申し訳なき、己の愚かさに対す

る自責の念から、笑みが苦みを帯びるのはどうにもならなかった。

己の失態は当然反省すべきだが、過ぎたことをいつまでも気にしては先には進めない。まず優先すべきは学園に帰ることであり、ならばこの後どのように動くかをすぐにでも定めるべきだろう。三郎は反省と自戒を一旦脇において思考を切り替える。

「それで、ここはどの辺なんだ？」

「往きに迂回した山の中腹辺りだな。街道へ戻ってもいいけど、このまま山を越えればかなりの近道になるんじゃないか。さほど高度もないし、獣道だが向こう側へ道も続いているらしい」
即返ってきた答えに、三郎の口角が上がりそうになった。

現在地を尋ねたのは、なるべく早く忍術学園へ帰り着くための道程を検討するためだった。いつものことながら、欲しいところにはまる勘右衛門の応対が心地いい。

だが現在の三郎はへらへらと笑っていられる立場にない。意識的に口元を引き締め、浮かびかけた笑みを殺した。

「そうか。ならこのまま山を越えるか」

取り繕った真顔で提案者を仰ぎ見、同意を示す。

勘右衛門は意を得たというように頷いたが、一拍置いて唐突に微妙な表情を形作った。困惑しているような、それでいて苦い笑いが滲んでいるような、何ともいえない顔である。

彼の妙な反応に心当たりなどない三郎は、訝しさを露骨に表情に出すことで説明を求める。微妙な表情のまま暫し沈黙していた勘右衛門は、しかし最終的に半笑いで口を開いた。

「……呆れるくらい元気だな、お前の息子」

苦笑が浮かんだままの彼の目は、床上に胡座をかいた三郎の股間に向けられている。三郎はそこで初めて、自身がゆるく屹立して袴を押し上げていることに気がついた。

思わぬ指摘を受け、思考が真っ白になる。

「……ッ、よ、欲を持ち越したんだ！ 仕方ないだろ……っ!!」

あの夢のせいだ。

途端脳裏に、現実に放り出されるまで目の前にあった魅惑的なうなじが鮮明に蘇る。

混乱しながらも咄嗟に声を荒げ、認識している事実とは異なる内容で反駁した。同時に両手を素早く翳し己の股間に向けられた勘右衛門の視線を遮る。

あまりの格好のつかなさで頭に血が上り、耳や首が熱を持つ。募る羞恥に内心で身悶えた。

だが三郎の言い訳を聞いてなお、勘右衛門は半笑いを崩さない。むしろより一層複雑そうな表情になった気さえする。

彼の目に、今の自分はどうか映っているのだろうか。三郎はひどく不安になった。未だ股間で存在を主張している己の息子を恨めしく思う。

「取り敢えず、一発抜いとけば？ 俺外出てるし。もう少し休んでから出発にしよう」

「その必要はない。放っておけばじきに治まる。もう昼過ぎだろ、あまり遅くなると先生方が心配なさる。雷蔵たちにも無駄な心配をかけたくないし、早く学園に帰ろう」

戸外へ踵を返そうとした勘右衛門を遮るようにその提案を拒み立ち上がった。今更格好などつけられやしないと分かっている、彼の前ではいつも通りに振る舞いたくて強がりと言っていた。

脳裏から魅惑的なうなじの画を無理やり掻き消し、般若心経を心の中だけで唱える。今なお元氣ハツラツ状態の己の息子が、一刻も早く大人しくなってくれるよう祈った。

頭と心を無にすることに注力しながら、近くに置かれていた勘右衛門の荷物を持ち主に投げ渡すことで出立の意思を示す。追って自身も手早く荷を身につけて土間へと下りた。

勘右衛門は荷物を受け止めた体勢で、微妙な表情のままこちらを眺めている。三郎は少々の気恥ずかしさを覚えつつも、気にしていないふりをして彼の横をすり抜けた。そのまま小屋の外へと出る。

周囲には、見覚えのない青々とした深い緑が茂っていた。命の限りに鳴いている蝉の声の大きさと存外に涼しい空気から、現在地が思っていたよりも山の奥深い所にあることを認識する。己を担ぎ込んだ勘右衛門はさぞかし大変だっただろうと一層感謝の念を深めた。

天を仰ぎ見れば、木々の枝葉の間から覗く空には薄い雲が広がっている。これから敢行しようとしている山越えで、夏の強烈な日差しと高温に苦しめられる心配はなさそうだ。

三郎は追って小屋から出て来た勘右衛門を顎で促すと、草木の茂る中へ続いている山道を、学園に向けて意欲的に歩き出した。

二、

思っていたよりも険しい獣道に、勘右衛門は思わず重々しい溜め息をついた。

往き道の街道ではなく山道を進むことになったのは、現在地を尋ねた三郎に最短経路の存在を教えたためだった。何故問われてもいかなかった最短経路を答えたのかといえば、その時彼が欲していた情報こそそれだろうと察していたからである。

読みは正しかったようで、三郎は大変満足そうだった。自分の言動に対してそんな嬉しげな反応を示した彼に、勘右衛門もまた大いに満足した。

しかし結果採用された道程は、今の自身には思っていた以上に負担が大きかった。

気を取り直して再び足を踏み出したが、たった一步を踏み出す己の足のなんと重いことか。重くだるい身体ではちよつとした斜面を登るにも一苦労だ。転がり落ちてしまわぬように足をぐつと踏ん張れば関節が軋み、最もダメージの深い腰と尻が悲鳴を上げる。

鈍痛に思わずしかめた顔を上げると、前を行く三郎との距離は既に少々開いてしまっていた。

（——元気でいいよな、なんにも知らないでさあ……）

勘右衛門は起伏に富んだ獣道を軽快に歩いていく背中を睨めつけて恨み言を、もちろん言え

やしないので内心だけで垂れた。

すべて自分の選択が招いた結果なのだ、自業自得だということなど分かっている。それでも不満に思わずにはいられなかった。

ことは忍務を終え学園へ帰る途中、道端に蹲る男女二人連れに出くわしたことに端を発する。どうやら女が体調を崩しているらしいと見て親切心からその男女に声をかけた。まさかそれが仇になるなどとは思ひもなかった。もちろん老夫婦などではなかったのだが、道に倒れている人に関わるとろくな目に遭わないのは落乱のお約束である。厄介なことに女は Ω で、予定外の発情期を迎えてしまったがためにその場に蹲っていたのだった。

この時勘右衛門は、生まれて初めて発情期の Ω と相対した。

独特の甘ったるい匂いは非常に濃厚で、 β である勘右衛門でも少々頭がくらくらしたほどだ。当然 α である三郎はもろに影響を受け、気がついた時には興奮状態に陥ってしまった。

自我を失った三郎はまるで獣だった。

名を呼んでも反応を示さない彼にかなり戸惑ったが、委員会での忍務につき対処できるのは勘右衛門ただ一人だ。三郎が Ω に襲いかかる前にと果敢に飛びかかると、格闘の末になんとかふん縛って地に転がした。取り敢えず Ω の身の安全を確保できたことに安堵の息をつく。

だが縛り上げられてなお唸り暴れている彼に、勘右衛門は途方に暮れるよりなかった。

道端にいつまでも留まっているわけにはいかないが、人の多い城下町へわざわざ戻るのも得策ではない。かといって学園まではまだ遠く、暴れる彼を担いで帰るのはどだい無理である。

どうしたものかと困り果てていた勘右衛門を救ったのは、 Ω の連れの男だった。この辺りの者であるらしいその男が『山の中腹に今は使われていない炭焼き小屋がある』と申し訳なさそうな顔で教えてくれたのである。

まずは興奮状態の原因である Ω と引き離すべきだろう。

そう考えた勘右衛門は、その情報を頼りに三郎を担いで山へと足を向けた。

山の空気は夏の昼間でも下界よりずっと涼しい。しかし小屋に辿り着いた時点で勘右衛門は既に汗みずくだった。

山中へ続く獣道は人の道としてそこそこ整備され十分歩きやすかったのだが、同じ歳頃の、しかもしばしば暴れる男を担ぎいしながらの登山は、正直に言ってかなりの重労働だった。

一連の騒動で疲弊した勘右衛門は、小屋の内外に危険がないと確認するやすぐに三郎を床の上に放り出した。伝い落ちる汗と鬱陶しくも首筋に貼り付いた髪を、まとめて雑に払う。首と肩を回して凝った筋肉をほぐしながら、深々と息を吐き出した。

だがようやく一息つけたというのに、勘右衛門はそれ以上休憩らしい休憩も取らず先刻放り出したばかりの三郎に馬乗りになった。己の体重で彼を押さえつけ雑に回していた縄を解く。

Ωと離れたためか単に消耗しただけなのかは不明だが、三郎は身じろぎもせずにもその場に転がっている。勘右衛門はその投げ出された両手両足をそれぞれ手早く括り直した。縄を引いて綻びがないことを確かめてから彼の身体から降りると、無遠慮に彼の懐へと手を突っ込んだ。

αはその性質上、Ωの発情にはどうしても影響を受ける。その対策として常に鎮静剤を携帯しているものだ。βには関係のない知識ではあるが、処世には必要不可欠な情報であるが故に勘右衛門は当然心得ていた。

恐らく三郎にとってもあれが初めての遭遇であり、故に上手く対処できなかったのだろう。だが抜け目のない彼のことだ、鎮静剤は肌身離さず持ち歩いているに決まっている。

暴れたために無駄の多い拘束となってしまうが、大人しくなって拘束も最低限にした今なら鎮静剤を探し出すのは容易い。重労働を強いられたのは事実だが今なお苦しげに喘いでいる彼を早く助けてやりたいと思うのは友として当然のことである。

ところが懐、次いで手甲や腰板、襟の裏に脚絆、荷の中まであらゆる場所を探し回ったが、鎮静剤と思しき葉は見つからない。

「——もしかしてお前、持ち歩いてないのかよ……?!」

想定外の事態に、つい問いかけるような言葉を吐いた。だが返ってくるのは苦しげな呻き声と荒い呼吸の音だけだ。彼は未だぼんやりとした顔で、芋虫がごとく床上でうごごしている。

「嘘だろ……。~~~~ああもう、何考えてんだこの馬鹿……！」

勘右衛門はそんな彼を、聞こえているはずもないと知りながらも苛立ち混じりに罵った。

無いものは仕方がないし、興奮状態は時が経てば治まることも知っている。だが治まるのにどれほどかかるのかは分からないし、苦しそうにしている彼をこのまま放置するのも忍びない。ならばどうするのがいいだろうか。

次善策がないものかと思案を巡らせた勘右衛門はふと、自身の携帯品に催眠剤があることに思い至った。

しかもそれは以前、学園総出で守備した園田村という小さな村の特産である強力な麻酔作用を誇る一級品だ。保健委員の目を盗みこっそり失敬したあの薬なら、興奮の治まらない α でも強制的に眠らせることができるのではないか。

そう考え、勘右衛門は己が妙案を早速実行に移そうと急いで荷を解いた。

しかし目当ての薬を探り当てたところで、ふと手が止まる。

そのまま、未だ興奮の治まらない三郎を静かに眺めた。

三郎は、いつもならものともしない平易な拘束に自由を奪われ床上に転がっている。人より薄い色の瞳は熱に溶け焦点が定まっていな。彼がその身を震わせる度、ゆらめく鼈甲に留まり切れなかった光の粒が輪郭の上を軌跡を描いて転がり落ちていく。

首筋や耳など彼自身の肌が露出している部分は余さず薄紅色に染まり、艶めかしい雰囲気を醸し出している。時折痙攣するかのように身体を跳ねさせるのが、どことなく卑猥な印象をもたらしっていた。袴の股周りの布地が押し上げられている様子からは、その下にいる彼の分身の現状が手に取るように分かる。

ひとり性的欲求に身悶えている三郎の様子に、勘右衛門は無意識に生唾を飲み下した。己の胸で打ち鳴らされている音は、その間隔を徐々に狭めつつある。顔に血が集まり、肌が勝手に熱を持つ。鼓動に引つ張られるように呼吸も速まり、次第に息苦しくなってくる。発情したΩの甘ったるい香りを嗅いだ時とは比べものにならないほど激しく興奮し、まるで霞がかかったかのように頭がぼうつとしてくる。

「……やっぱり、俺は欠陥品だな」

淫欲に溺れた三郎を眺めて興奮している自分を、勘右衛門は苦く晒わらった。

「女でも、Ωですらない。……孕めもしないというのに——お前が欲しくて堪らないんだ」

この機会を逃す手は、ないのではないか。頭の中で悪魔が囁く。